

田村遺跡 XI

— 第14・15次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第423集

1995

福岡市教育委員会

田村遺跡 XI

- 第 14・15 次 調査報告 -

福岡市埋蔵文化財調査報告書第423集



遺跡略号 TMR-14・15

遺跡調査番号 9248・9320

1995

福岡市教育委員会

序 文

福岡市西部に位置する早良平野は古来より先達の生活の場であったようで、緊急発掘によって明らかになった遺跡も年ごとに数を増してきています。

田村遺跡は、これまでの調査によって古代から中世にかけての遺跡として知られてきました。ここに報告するのは市営団地の建設に伴って実施された埋蔵文化財の調査結果です。今回確認された建物群は中世の集落の広がりをしめすもので、貴重な資料を得ることができました。なかでも土坑や井戸から出土した陶磁器や滑石製品は、当時の交易や流通を知るうえで注目されます。

将来この報告書が内外の文化交流に役立つことを期待します。

さいごになりましたが、調査を実施するにあたりご協力いただいた関係者のみなさまに心より御礼を申し上げます。

1995年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 尾花剛

例　　言

1. 本書は、集合住宅の建設に伴って発掘調査した福岡市早良区大字田に所在する田村遺跡第14・15次調査の報告書である。
2. 調査は、福岡市教育委員会を主体に1992年・1993年度に発掘調査、1994年度に整理作業を行った。
3. 本書に使用する方位はすべて磁北である。
4. 遺構の実測は、調査参加者で分担して行った。
5. 写真撮影は、調査参加者のほか気球写真を空中写真企画に委託した。
6. 遺物は実測および解説は、調査担当者のほか陶磁器を田中克子がおこなった。
7. 本書に使用した地図のうち (Fig-1) は、国土地理院発行の5万分の1図福岡を使用した。
8. 出土遺物は、福岡市埋蔵文化財センターで収蔵・保管の予定である。
9. 本書の編集は、常松が行った。

遺跡調査番号 9248・9320

遺跡略号 TMR-14・15

分布地図番号 93-A-21

調査地地籍 福岡市早良区大字田地内

開発面積 3,037.43m²

調査面積 3,000m²

調査期間 1992年11月30日～93年1月31日、1993年6月17日～93年7月31日

本文目次

1. 調査の記録.....	2
2. 造構配置.....	4
3. 造構解説.....	6
4. 出土遺物.....	10
5. まとめ.....	12

表 目 次

Tab- I. 田村遺跡調査一覧表	5
-------------------	---

挿 図 目 次

Fig- 1. 周辺遺跡の分布（縮尺 1/50,000）	3
Fig- 2. 田村遺跡調査区位置図（縮尺 1/5,000）	4
Fig- 3. 田村遺跡第14・15次調査区遺構配置図（縮尺 1/300）	折込
Fig- 4. SE-01・SX-02・SK-03・SE-04実測図（縮尺 1/40）	7
Fig- 5. 堀立柱建物実測図 1（縮尺 1/80）	8
Fig- 6. 堀立柱建物実測図 2（縮尺 1/80）	9
Fig- 7. 第14次調査出土遺物実測図（縮尺 1/3）	11
Fig- 8. 遺構分布状況（縮尺 1/1,000）	12

図 版 目 次

PL. 1 田村遺跡第14次調査区全景（東より）	
PL. 2 田村遺跡第14次調査区全景（上空より）	
PL. 3 発掘調査風景（北より）[上]・発掘作業風景[下]	
PL. 4 SE-01検出状況[上]・SE-01石鍋出土状況[下]	
PL. 5 SX-02白磁鉢出土状況[上]・SK-03検出状況[下]	
PL. 6 SE-04検出状況（北より）・SE-04完掘状況（北より）[下]	
PL. 7 堀立柱建物群近景（東上より）[上]・SB-05近景（東上より）[下]	
PL. 8 田村遺跡群調査区位置図（南より）[上] 田村遺跡第15次調査区南側（北より）[上]	
PL. 9 第15次調査区北側の遺構分布（南より）[上]	
第15次調査区北側、SB-09検出状況（西より）[下]	
PL.10 SX-02出土陶磁器、輪花白磁碗（SE-01）、滑石製鏡（SE-01）	

田村遺跡第14・15次調査

Key-words

- 10~11世紀
- 白磁鉢
- 挖立柱建物群



14次調査区の遺構配置

I. 調査の記録

調査の概要

平成4年1月、福岡市建築局住宅計画課から教育委員会埋蔵文化財課に福岡市早良区大字田における市営住宅建設事業に伴う埋蔵文化財の有無について照会された。埋蔵文化財課では、該地が田村遺跡群に含まれていることから、同2月17日、試掘調査を実施した。その結果遺構の存在が確認されたため調査を行なう方向で協議がもたれた。調査は工程上、92年度と93年度にわたって実施することになり、建築物の基礎部分を最初に調査し、残りの部分を翌年度に実施することで合意した。条件整備の整った平成4年11月30日から発掘調査を開始した。14次調査は、予定通り2月で終了した。平成5年度は6月17日から7月にかけて実施したが、稀に見る異常気象でとにかく雨の日がつづいた。調査区は幾度となく水浸しになったが、どうにか期限内で調査を終えることができた。

調査委託 福岡市建築局 管理部住宅計画課
調査主体 福岡市教育委員会 埋蔵文化財課
調査総括 埋蔵文化財課長 折尾 学
埋蔵文化財第一係長 飛高憲雄（前）横山邦雄（現）
事前審査 主任文化財主事 井澤洋一
吉武 学（試掘） 長家 伸
庶務 吉田麻由美（前）
調査担当 埋蔵文化財第一係 常松幹雄
調査補助 古川千賀子（福岡大学人文学部考古学研究室）
俵 寛司（九州大学考古学研究室）
調査・整理参加者 有村洋一郎・池田由美・石橋テル子・衛藤美奈子・大穂アサ子
大穂栄子・大穂ヤス子・金子由利子・小金丸ミネ子・坂田美佐子
佐藤隆・柴田タツ子・柴田常人・末松タツエ・末松美佐子
瀬戸啓治・削田博記・高橋茂子・土斐崎孝子・鳥井原良治
中村昭市・永末京子・波多江喜代子・土生ヒサヨ・原美晴
平野義雄・船越恒人・堀ウメ子・堀本歳四郎・松井フユ子
松本藤子・真鍋キミエ・百武義隆・門司弘子・八波達彦
吉川順岳・脇坂レイコ

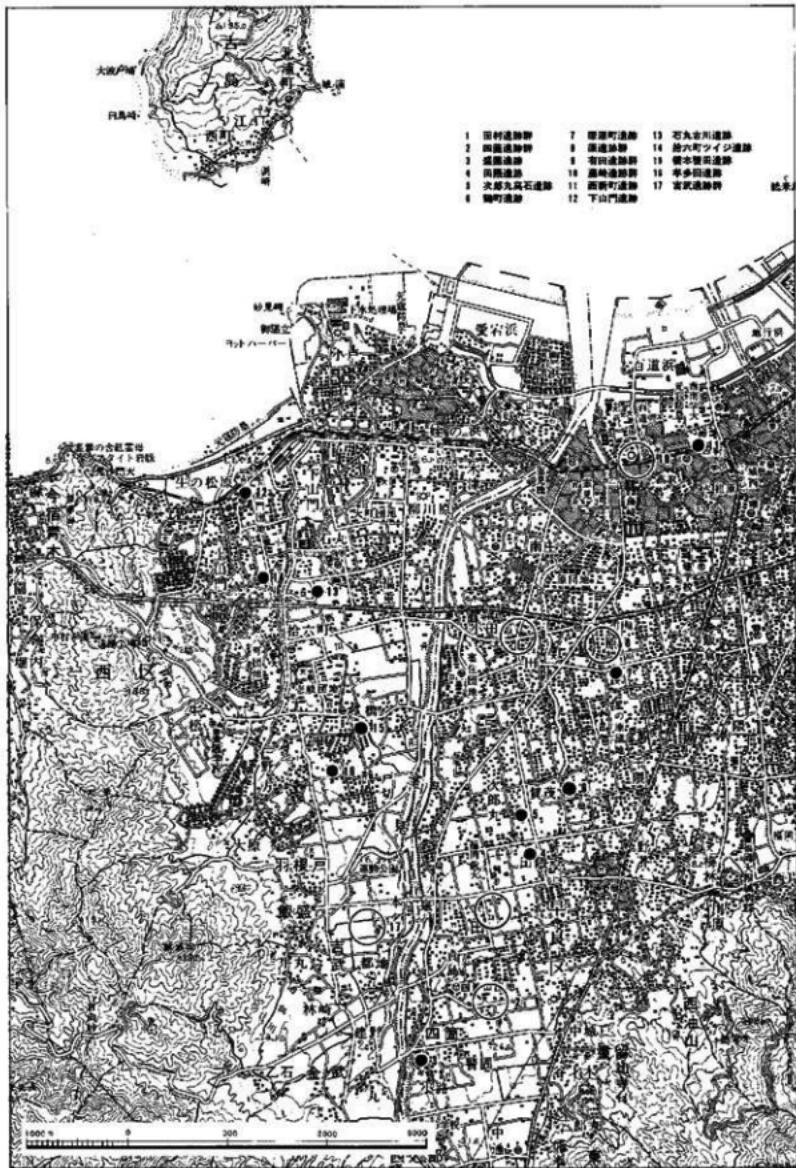


Fig. 1. 周辺遺跡の分布 (縮尺 1/50,000)

2. 遺構配置 (Fig-3)

田村遺跡は室見川東岸の沖積地上に展開する東西約760m、南北約850mの遺跡群で標高15mから16m前後である。学校・団地・道路建設等に伴い、これまでに16次の調査が行なわれてきた。その結果、縄文時代から近世に至る多数の遺構及び遺物が確認され、遺跡の様相が明確になりつつある。

その概要は第1表にまとめたが、中心となる時期は弥生時代及び中世で、前者では前期の段階にはすでに第5次調査で検出されて墓地等から生活の痕跡が看取される。中期以降には第2・3次で確認された水利施設や第3・17次調査の堅穴住居から推察すると、沖積地における水田下位発芽期に本格的に開始され、遺跡東側の微高地上に集落が營まれたものと考えられる。

平安時代の後半遺構には多数の掘立柱建物群が2～5次・14・15次調査で検出されており、該期に平野内における最大規模の集落を出現を見ることができる。特に、第5次調査で確認された集落は継続的かつ拠点的なもので、建物規模や出土遺物の質量が他を凌駕する。また、本遺跡も含め周辺地域には整然とした条里地割が既存の道路・水路・水田・畦畔に良好に遺存しており、その地割に重複する南北方向の溝が第5・7・11・13次調査で検出されている。第12次調査では、本調査以前には断片的にしか確認されていなかった東西方向の溝を比較的良好に検出することができた。

今回報告する第14・15次調査区の旧況は、田である。約3,000m²の敷地のうち建物部分を92年度(14次)、駐車場部分を93年度(15次)に調査した。

検出された遺構は、土坑や井戸4基と掘立柱建物5基にのぼる。調査の結果、遺構の分布は北西部に集中しており、掘立柱建物の方位もほぼ南北方向を示している。建物群の東側に不整形の土坑SX-02が位置する。その東側の柱穴は建物としてまとめることはできなかったが、柵列などの可能性も含ん

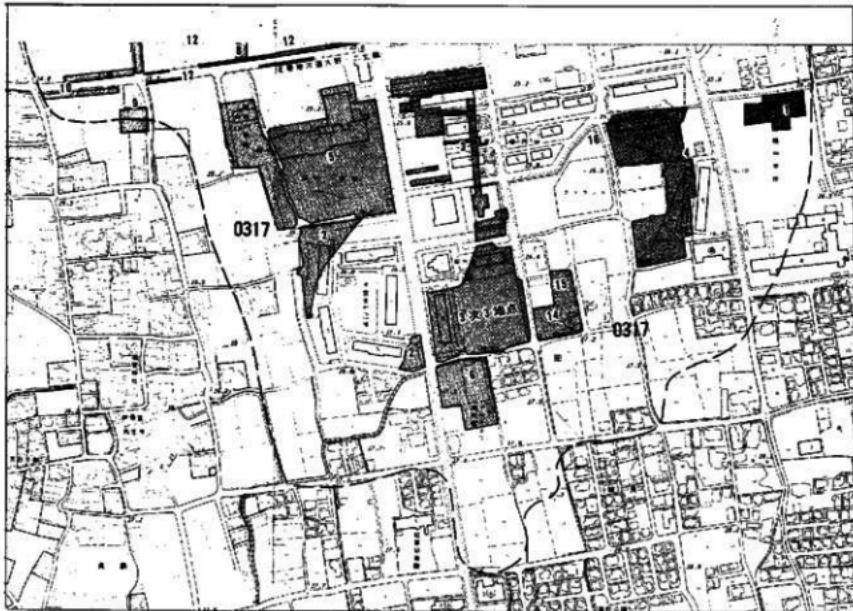


Fig-2. 田村遺跡調査区位置図 (縮尺 1/5,000)

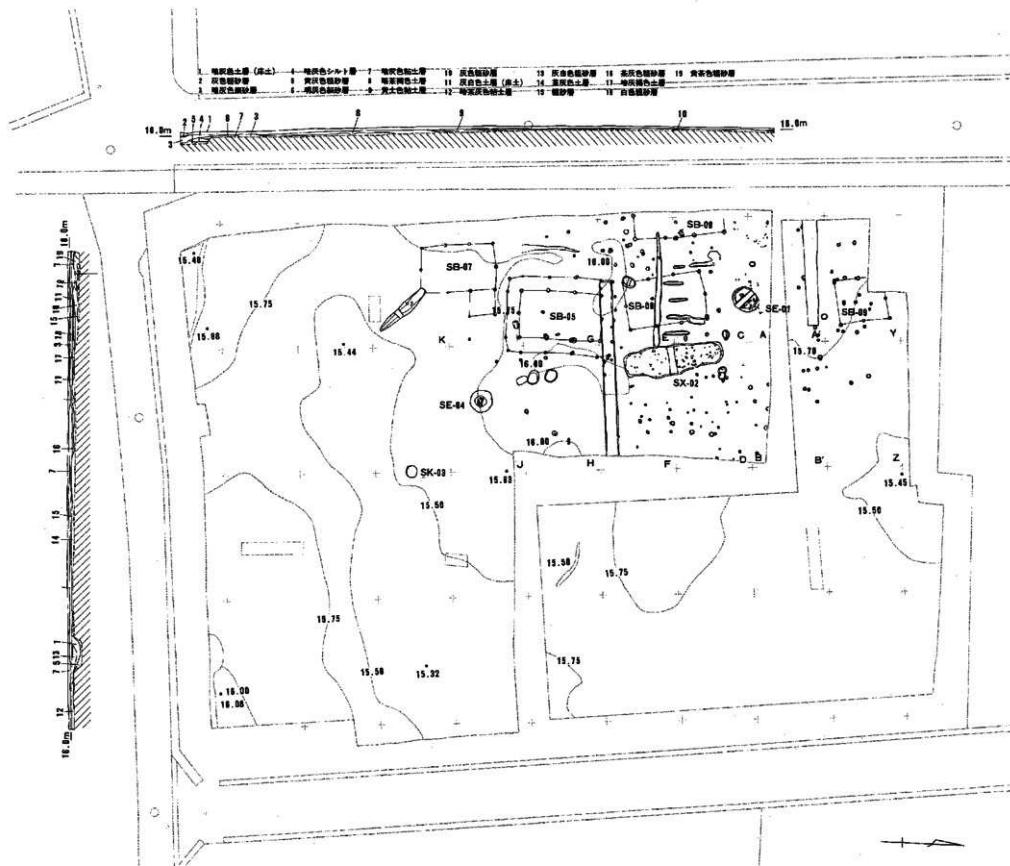


Fig-3. 田村造林第14-15次調査区造林配置図 (縮尺 1/300)

でいる。

SE-01、SE-04は井戸跡とされる土坑で、SK-03は、建物群から離れていることや覆土が黒漆色を呈していることからトイレ遺構の可能性もある。調査区の南東部は遺構の密度は、希薄になり柱穴も検出されなくなる。

調査次数	調査年度	調査概要	調査報告書
第1次	1978	古墳時代前期の土坑、平安時代の土坑等	市報第70集
第2次	1980、1981	弥生時代中期の河川・井堰、古代～中世の櫛・掘立柱建物・竪穴住居・土壙墓等	市報第89集 市報第104集
第3次	1981、1982	弥生時代の竪穴住居・河川・杭列、中世の掘立柱建物・井戸等	市報第167集
第4次	1982、1983	平安時代掘立柱建物・土坑・井戸等	市報第216集
第5次	1984、1985	縄文時代後・晩期土坑・弥生時代前期の甕棺墓、中世の掘立柱建物・土坑・井戸等	市報第192集 市報第200集
第6次	1984	縄文時代後・晩期のピット等	未報告
第7次	1984	古墳時代の竪穴住居・甕棺墓・中世の溝等	市報第168集
第8次	1988	中世の溝等	市報第384集
第9次	1989	中世の溝・土坑・柱穴等	市報第302集
第10次	1989	中世の溝・柱穴等	未報告
第11次	1990	中世の溝等	市報第384集
第12次	1992	中世の溝・土坑・井戸等	市報第385集
第13次	1992	平安時代土坑、中世溝等	市報第384集
第14次	1992	平安時代掘立柱建物等	本報告
第15次	1993	平安時代掘立柱建物等	本報告
第16次	1993	旧河川等	埋蔵文化財年報8
第17次	1993	弥生中期前半～後半竪穴住居・溝等	未報告

第1表 田村遺跡調査一覧表

3. 遺構解説

遺構は通し番号で、あたまに遺構を性格づける略号を付した。遺物を出土した柱穴は調査区ごとにP-番号をつけた。

個別の遺構 (Fig-4)

SE-01 長軸2.16mで短軸1.74m、深さ0.67mの土坑、底部で石鍋が検出された。埋土は、下から1. 暗灰色粘質土層(炭化物を多く含む)、2. 暗褐色土層、3. 暗灰色土層となる。井筒の痕跡は確認されなかつたが、堀型の規模や位置から井戸跡としておこう。

SX-02 長軸7.85mで短軸2.35m、深さ15cm前後の南北に長い楕円形の土坑。罐や陶磁器、土師器などがまばらに検出された。埋土は、暗灰色で炭化物の粒子を全体に含む。遺構の性格は不明だが、掘立柱建物と長軸方向が共通し、切り合ひもないことから同時期のものとみられる。

SK-03 長軸0.73mで短軸0.65m、深さ0.6mの楕円形の土坑。漆黒色の埋土に暗黄灰色土がブロック状に混入する。この箇所は掘立柱建物の分布から外れており、地形は、南東方向に緩やかに傾斜する。外部施設は確認できなかつたが、トイレ状遺構の可能性もあるので現在分析を委託している。特筆すべき事実が分かれば別稿に紹介したい。

SE-04 径1.70m、深さ0.7mの土坑、底部に木片、甕。埋土は、下から、1. 黒色粘質土層(木片・甕を含む)、2. 暗灰色粘質土層(褐色ブロックを少量含む) 3. 噴灰状粘質土層(褐色ブロックを多く含む)、4. 暗灰色砂質土層となる。井筒の痕跡は確認されなかつたが、堀型の規模や位置から井戸跡としておきたい。

掘立柱建物 (Fig-5・6)

SB-05 四面庇付きの南北に長い建物で、梁間2間、桁行3間である。庇と身舎の間隔は東西南北ともに1.1m前後である。身舎の梁間全長は、3.6m、桁行全長は、6.5mをはかる。

SB-06 桁行3間の南北に長い建物である。西側は、道路下につづくとみられる。桁行全長は、7.2m、梁行は、南側で1.8mをはかる。

SB-07 南北に長い梁間2間、桁行3間の建物で、南東部の柱穴部が狭長な土坑になっている。また北西部の梁の延長上に各一間の柱穴が検出されており、付帯施設と考えられる。梁間全長は、3.7m、桁行全長は、5.6mをはかる。

SB-08 南北に長い梁間2間、桁行3間の建物である。梁間全長は、3.8m、桁行全長は、6.2mをはかる。

SB-09 梁間2間、桁行2間以上の建物であろう。梁間全長は、3.8m、桁行全長は、3.9mで、桁行は、さらに北に延びると思われる。

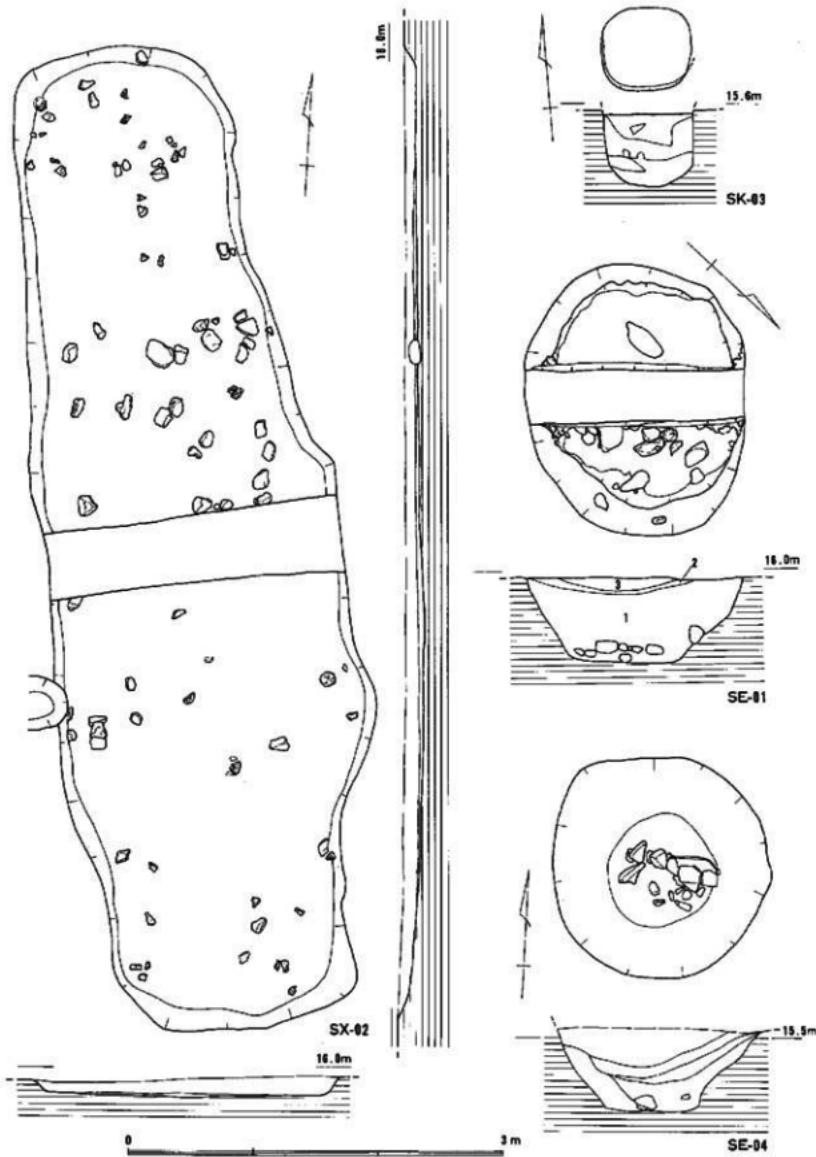


Fig-4. SE-01-SX-02-SK-03-SE-04実測図 (縮尺 1/40)

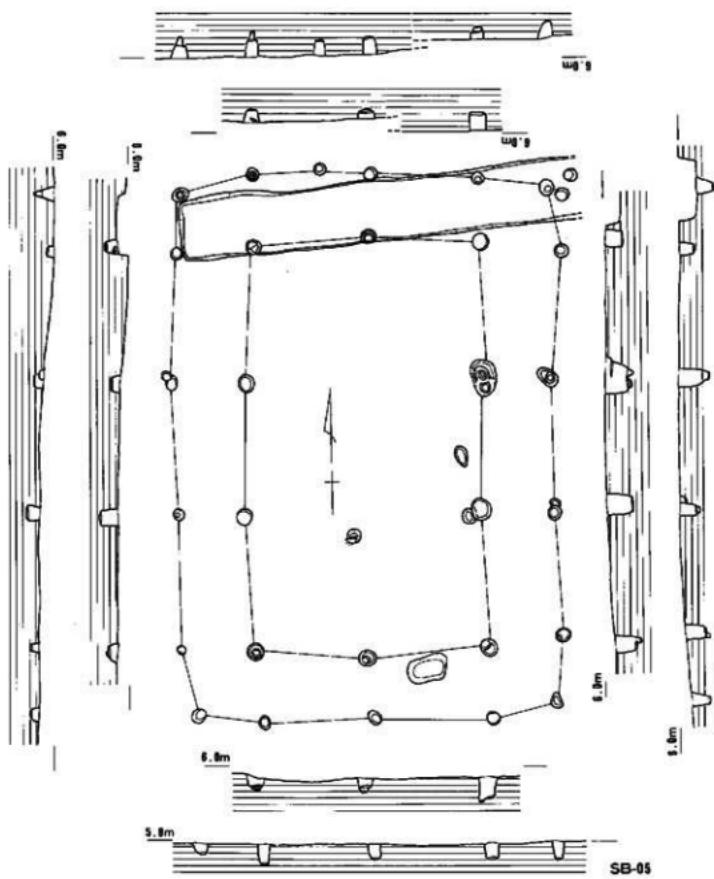


Fig-5. 堀立柱建物実測図 I (縮尺 1/80)

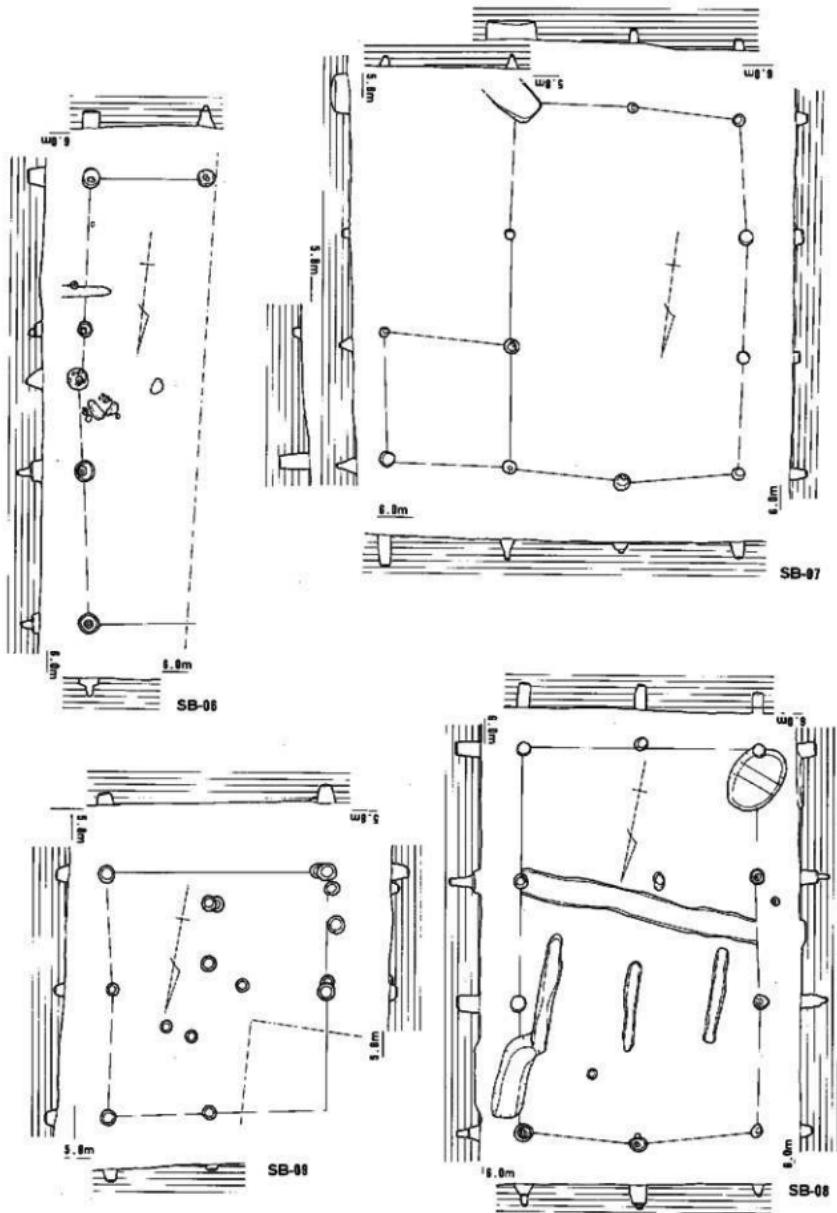


Fig- 6. 振立柱建物実測図 2 (縮尺 1 /80)

4. 出土遺物

SX-02出土の陶磁器には、越州窯系青磁皿A-1-6類（田中分類）が1点、A類片が1点、白磁鉢1点、白磁碗3点、白磁碗片XII類（山本分類）4点出土。ここで図化したのは、001、002、003の三点。

001は、越州窯系青磁皿で、底部破片で高台は撥型に広がる。高台両脇に横ナデが認められるが、貼り付けかどうかは不明。復元高台径は9.0cm。見込みにヘラ形により施文されており、紋様は花文と思われる。胎土は淡灰色で、きめは細かく精良で硬陶質である。釉調はやや青みをおびたオリーブ色透明釉で光沢がある。

002の白磁鉢は、半球形を呈し、口縁は直口し、口縁や下位でゆるくくびれ丸く底部にいたる。底部は基底底である。口径は13.8cm、器高7.4cm、底径5.6cmに復元される。胎土は淡灰色でそれほど精製されていないが硬質である。釉調はわずかに青味をおびた灰白色で、全体に白済し光沢は鈍い。外底部を除いて全て施釉されている。外面にはくびれ部より下位にヘラによる線刻が施される。これは残存部分より推定すると、体部の左右両面に半円弧を描くように施文されている。内底近くに擦痕が認められるが使用痕かどうかは不明。

003の白磁碗は、口縁部の破片でやや内湾する。大きく内斜し、口径に比べ器高は低い。復元口径は13.3cm。内面に浅い段がある。外面口縁近くまで回転ヘラ削りが施される。胎土は純白でよく精製されておりきめ細かいがやや軟質である。釉調はやや黄色がかった透明釉で光沢がある。

004の土師器柄は、細く高い高台が貼付されており、高台径は9.0cm。胎土はやや赤味を帯びた淡褐色を呈し、砂粒をほとんど含まずきめ細かい。外底はヘラ切りと思われる。内面に線刻が施される。10世紀中頃～11世紀のものか。柱穴（E区SP-01）出土。

005の土師器碗は、撥状に開く細くやや高い高台が貼付され、高台径は7.5cm。体部は丸味をおびる。胎土は褐色を呈し、細かな砂粒をやや多く含みきめはやや粗い。器面の摩滅が著しく調整は不明瞭である。11世紀代頃のものか。SK-03出土。

006の土師器丸底杯は、口径15.0cm、器高3.3cm。底部はヘラ切りで、内面にはヘラ磨きが施されており、一部分コテあて痕が認められる。11世紀後半～12世紀初頭。柱穴（G区SP-02）出土。

007の白磁碗は、口縁上端はヘラで切り込みを入れ、また外面には縦位の線を入れながら押さえて輪花に仕上げている。胎土はきめ細かく精良で硬質。わずかに青味を帯びた透明釉が施されており、光沢がある。SE-01出土。

008の石鍋はU縁の外縁部に横長で長方形の耳を有するタイプである。全体の3分の1程を存す。復元口径33.3cm、高さ16.8cm。内面に細かく深い整跡、外面に削り痕跡がみられる。口径部は全周の1/5程度しか違っておらず、平面形が隅丸方形を呈するものか、何対の耳であったかは明らかでない。体部下半2箇所に煤が付着している。SE-01出土。

参考文献

- 田中克子「北部九州における越州窯系青磁精製品について」『先史学・考古学論叢』熊本大学考古学研究室20周年記念論文集、1994
山本信夫「太宰府の中国陶磁－白磁分類の問題点」『古文化談叢』20巻中、九州古文化研究会、1989
森田 勉「滑石製容器－特に石鍋を中心として－」『佛教藝術』148号、毎日新聞社、1983

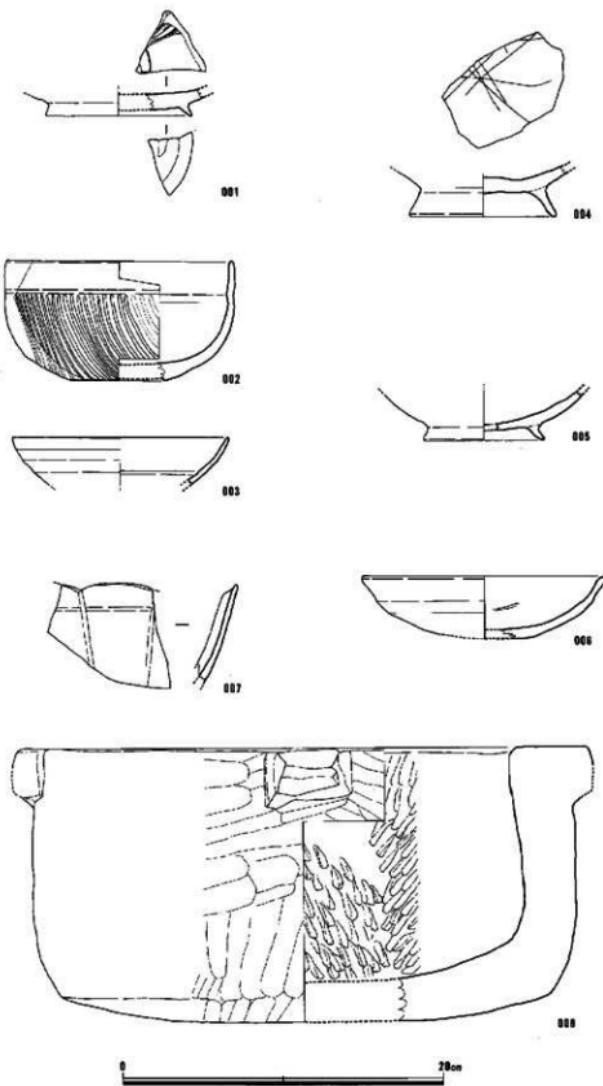


Fig- 7. 第14次調査出土遺物実測図（縮尺 1 / 3）

5. まとめ

今回の調査の結果、掘立柱建物の分布を確認することができた。これまで西接する第3地点の掘立柱建物群につながるもので、建物群の広がりを把握できたことは最も大きな成果といえよう。また北東100mで検出された第4次調査地点の掘立柱建物群との関係についてはさらに北東部のデータが必要である。第14・15次調査では遺構の分布は北西部に集中しており、掘立柱建物の方位もほぼ南北方向という傾向がみられる、掘立柱建物に立替えがみられないというのも特徴といえよう。

SX-02の東側の柱穴は建物としてまとめることはできなかったが、柵列などの可能性も含んでいる。付帯施設をもつSB-07は、これまでの調査で検出されていないようで、性格不明遺構としたSX-02や暫定的にSEとした遺構を含め、建物の配置を踏まえた論議を期待したい。

SX-02出土の白磁鉢の出土例は、これまで日本における既報告の中に見い出せない。今のところ生産地を明確にすることはできないが、中国では広東省広州市西村窯にその類似の器形を求めることができる。また森本朝子氏の教示によると、その施文方法は宋代磁州窯、輝州窯の製品や元代吉州窯系の製品に類似品が存在することである。このように、この種の製品は中国では宋代以降、伝統的に広範囲で焼成されていたようである。今回、北宋初期の越州窯系青磁、白磁が一括して出土したことは、その時代性を検討する上で、意義深いことである。

参考文献

「広州西村窯」広州市文物管理委員会・香港中文大学文物博物館合編 香港中文大学中国考古藝術研究中心出版、1987

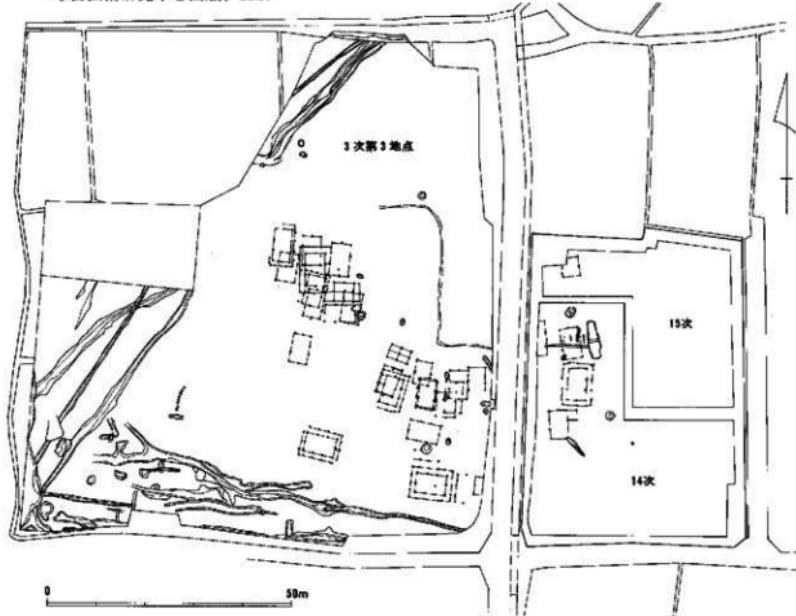


Fig. 8. 遺構分布状況（縮尺 1/1,000）

図 版

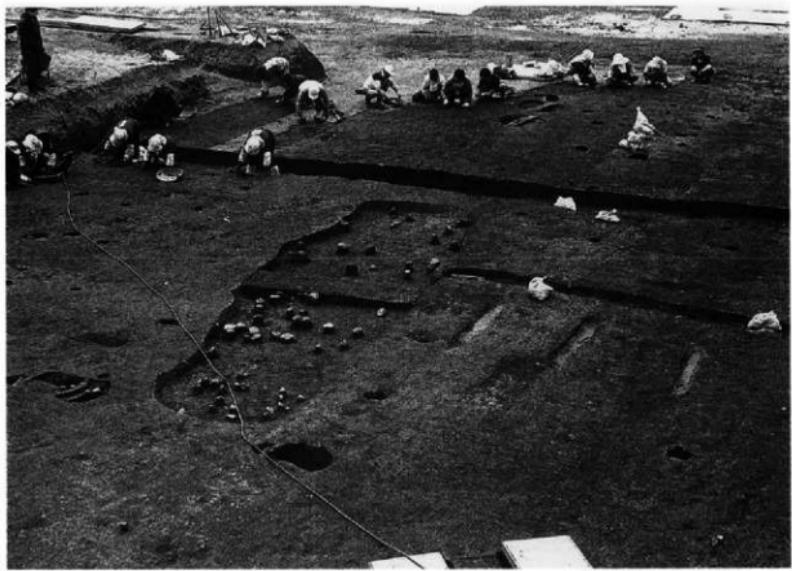


田村遺跡第14次調査全景（東より）

PL. 2



田村遺跡第14次調査全景（上空より）



発掘調査風景（北より）



発掘作業風景

PL. 4



SE-01検出状況



SE-01石鍋出土状況



SX-02白磁鉢出土状況



SK-03検出状況

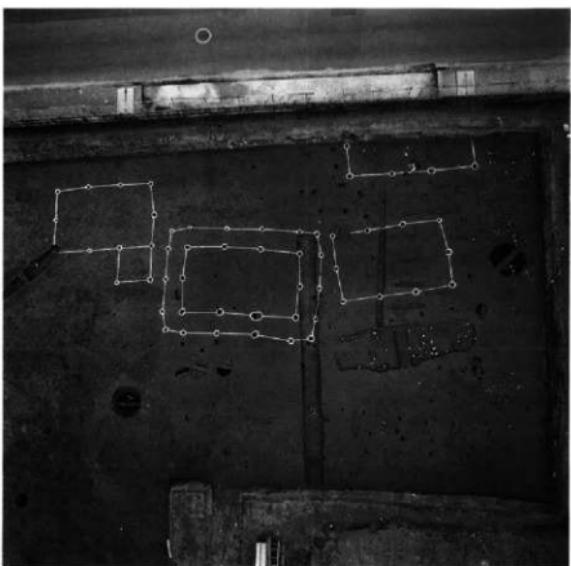
PL. 6



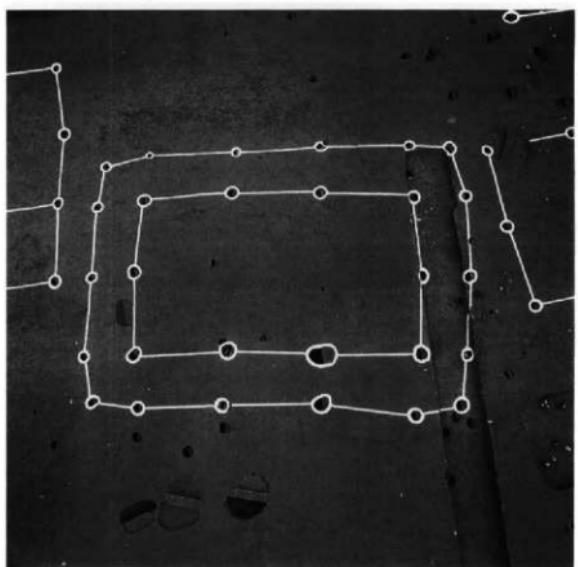
SE-04検出状況（北より）



SE-04実探状況（北より）



掘立柱建物群近景（東上より）



SB-05近景（東上より）

PL. 8



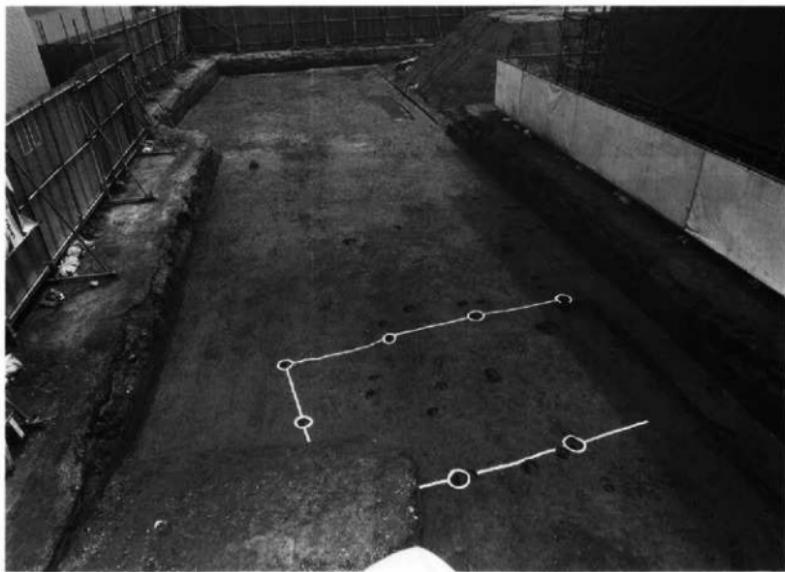
田村遺跡群調査区位置図（南より）



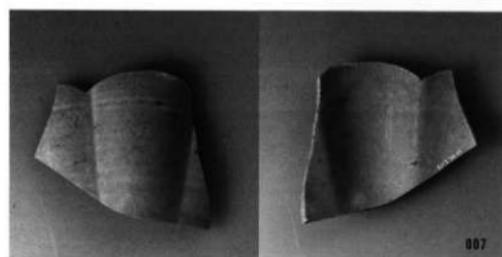
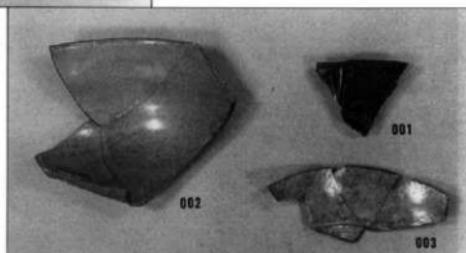
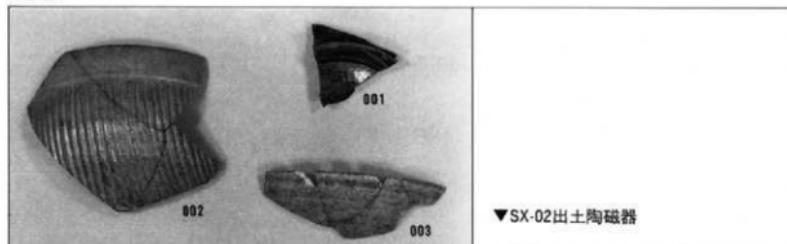
田村遺跡第15次調査区南側（北より）



第15次調査区北側の造構分布（南より）



第15次調査区北側、SB-09検出状況（西より）



◀ 輪花白磁碗 (SE-01)



福岡市埋蔵文化財調査報告書 第423集

田村達郎Ⅺ 1995年3月31日発行

編集発行：福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8番1号 埋蔵文化財課

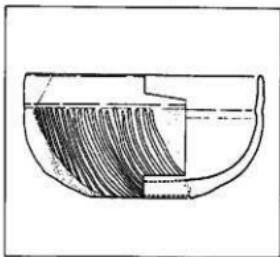
〒810 ☎092-711-4667

印刷所：正光印刷株式会社

営業所／福岡市中央区赤坂1丁目3番7号

〒810 ☎(092)741-3266 FAX 741-2207

Tamura Ruins 14th&15th
Excavation Report of Settlements
in Heian Period



white-glazed bowl

March 1995

The Board of Education of Fukuoka City
Japan